

私と方正

橋本 清一

「橋本さん、方正へ行きたいやけんとおお、無理かなあ」と、初めて「方正」という地名を聞いたのは、30年近く前の金沢でした。「方正へ行きたい人がたくさんおるんやけどおお」と訪ねて行った当時の石川県日中友好協会（正統）の事務所で、事務局長から是非とも行きたいと色々お話を伺いました。私の日中旅行社名古屋営業所勤務時代の頃でした。当時、北陸に事務所は無く名古屋営業所が北陸3県を担当していました。早速事務所へ帰り、「方正」のことを調べましたが、当時は未開放地区が多く「方正」も開放されていないため訪問することはできませんでした。「残念ですが今は未開放だから行けませんが、きっとそのうちいけるようになりますよ」となぐさめの気持ちを込めながら、回答したことを昨日のように覚えています。事務局の北崎カヨさんという優しいおばさんも、傍らでこのやり取りを聞いていました。彼女は、中国研究所研修学校の第一期生で、第十期生の私の大先輩でした。彼女からも何とかして欲しいとよく依頼されましたが、色々手を尽しても当時は不可能でした。「方正」を「ほうまさ」と呼んで「宝清」と区別していたことも、その時に知りました。

1982年に名古屋営業所から東京本社に転勤となり、「方正」は暫く私の周りから消え去ってしまいました。再び「方正」と巡り合うことになりましたのは、調布市の医師で元佳木斯医科大学出身の池田精孝先生の仕事をさせて頂いてからでした。先生のご家族がいらっしやった大古洞開拓団跡を尋ねる旅には、必ず方正の日本人公墓参拝が組まれていました。以来、毎年大古洞開拓団・小古洞開拓団跡・柏崎開拓団跡・大八浪開拓団跡・通河県などの訪問に、必ず「方正」日本人公墓がセットされていました。この十年来、池田先生と一緒にさせて頂き、「方正日本人公墓」を毎年参拝するようになりました。

方正を訪れるたびに、当時の悲惨な難民の苦労を思いやり、やるせない思いに駆られますが、日本国の非道な対応に比べ、残留婦人松田ちえさんの同胞の無残な姿を見るに見かねてお願いした純粋な気持ちへの、周総理の果敢で的確な指示に改めて感謝の気持ちが強く湧いてきます。

国策によって旧満州国へ開拓という名の下での土地略奪、権力掌握、つまり侵略に加担させられ、召集は無い・関東軍という最強の軍隊が防衛する楽土との触れ込みで、いざとなったら根こそぎ召集されるは、最強部隊はさっさと逃げ出し、守る者は自分たち年寄りと婦女子のみで、無残な生き地獄を見せられる。この責任を誰に問えばよいのか、方正日本人公墓の上空には望郷の念にふくらみ、恨みを一杯抱えた霊魂がたくさん舞っている様な気がします。

戦争は悲惨だというけれど、未だに地球から戦火の消えた験しは有りません。

日中両国の将来の為にも、過去の触れたくない事実を直視し、より多くの方々に知って頂き、風化させる事無く次世代に伝える事こそ大変重要なことであるとおもいます。

中国東北地区だけでは有りませんが、方正以外にも沢山の日本人埋葬地や、軍事機密上殺害された中国人の所謂、万人抗も沢山ありますので、そのシンボリック意味合いとして、「方正日本人公墓」を更にしっかりとした物にすべきかと思えます。国民的総意で日中不再戦の日を設け、両国首脳の手書による石碑を記念として建立したら如何でしょうか。

日本国の対外予算は大いに削られ、とても「方正」には回せないでしょうが、過去のことを思い起こせば、国策としてきたことの結末ですら始末しないでは、この世は通らないのではありませんか。生きて帰った人々には、わずかではあるが保障した、他の南洋の人たち、本土で戦災に遭った人たちも皆同じだと言う人もあるかもしれないが、国策で行かされた満州は別物だと思う。ましてや、彼の地で命を無念にも落とされた方々の鎮魂は、国の事業として行うべきだと思いませんか。

であれば、「方正日本人公墓」を「日中平和祈念公園」とし日本人公墓（周辺で路上に現れているご遺骨を収集し公墓に埋葬）と中国側の烈士陵园を同じ公園内で併設したら如何でしょうか。敷地面積は今の十倍ぐらいにして、費用は日本国側が8割日本側民間2割で負担し、中国への修学旅行はこの「日中平和公園」を必ず訪れることと明文化する。

日本と中国は一衣帯水の隣国と言われますが、実際は更に多岐にわたる深い関係が有り、DNAも極めて近い本当の親類縁者の関係に有ると思えます。両国が手を携えて（綺麗過ぎる表現で、実際は騙したり騙されたりの関係もあることでしょう）東アジアで如何に生き残るかという、切実な課題に取り組み始めた今、やはり中国と共生する覚悟が必要かと思えます。その両国の友好のシンボルとして活用されるなら、「日本人公墓」にお休みになっている人々、「養父母の墓」に眠る残留邦人の養父母たちも、草葉の陰でお慶びになることでしょう。

<はしもとせいいち、日中友好宗教者懇話会理事、改革開放体制以前から、中国専門の旅行社に長年勤務し交流活動に携わる。今回は添乗員として参加>